

大阪の張子玩具職人関係資料「柴垣清メモ」について

伊藤 廣之

はじめに

大阪市立博物館では、一九九一年に大阪の張物玩具の製造元であった柴垣家から柴垣清氏収集の近代大阪関係資料の寄付を受けた。この資料群（以下、「柴垣コレクション」と略す）は、おもに柴垣清氏が収集した近代大阪の歴史資料三四一五点、芸能資料八五七点、民俗資料一〇七点からなっており、民俗資料のなかの郷土玩具関係資料の大半は柴垣家に伝来しているものではないかと推測される。また郷土玩具関係資料のなかには、大阪の張物玩具の製造に関わる同業者仲間の記録『張人形諸類控』（明治一二年）が含まれており、その概要については『館蔵資料集二〇 大阪の郷土玩具』（一九九三年）で紹介したことがある。

本稿で紹介する「柴垣清メモ」は、柴垣コレクションの受贈にあたって参考資料として収集したものである。「柴垣清メモ」は、「張物ネリ物製造家系統」・「天保十四年二居ケル玩具問屋表」・「奉公人請状ノ事」・「明治十二年張人形諸類控」に関して便箋一八枚に綴られたメモ書きと、「張物玩具商分布圖」（一枚）からなる。「柴垣清メモ」の内容については、批判

的検討が必要であるが、大阪の張物玩具製造家の所在地や系譜関係、張物玩具商の歴史について関係者の末裔が記したものであるとして資料的価値が高いと考えられる。本稿では、今後の大阪の張物玩具に関する研究資料として、「柴垣清メモ」の一部を紹介することにした。

一 柴垣清氏と柴垣清メモについて

柴垣清氏の経歴と収集資料の概要については、一九九二年に開催された特別陳列「近代大阪の暮らしと風景」の展覧会目録一一六号のなかで紹介されている。それによれば、柴垣清氏は一九〇七年（明治四〇）一〇月一八日生まれで、大阪市立南大江小学校、大阪市立生野中学校から、慶應義塾と早稲田大学を経て、一九三〇年（昭和五）に大阪市東区役所に勤務した。しかし、その二年後には区役所を退職し、布施市にあった協和酸素株式会社就職している。三五年間勤務し、退職後は自治会の会長や日赤奉仕団の活動などに携わり、一九八九年（平成元）に八二歳で他界した。「柴垣清メモ」によれば、柴垣家は池田の出身で、張子の面を中心とし

た製造をおこない、「面清」を名乗っていた。家業の張物玩具の製造は柴垣清七、柴垣清二郎、柴垣清と続くはずであったが、柴垣清氏は家業を継承せず、大学を出てからはサラリーマンとなったため、張物製造は柴垣清二郎氏の代が最後となった。柴垣清氏は庶民の日常生活の歴史に関心をもち、さまざまな資料を収集していた。そのなかで、家業の張物製造の歴史にも関心を抱いていたようで、本稿で「柴垣清メモ」と名付けたものは、大阪の張物製造家の所在地や系譜関係、張物製造の歴史に関する覚書のよくなものからなっている。それは柴垣清氏が見聞きした体験的知識にもとづくものといえるが、「柴垣清メモ」の内容を『上方』など第二次世界大戦前の雑誌や文献に掲載された大阪の郷土玩具に関する記事とつきあわせていくことで、これまで知られていなかった大阪の張物製造に関する実像が浮かび上がってくる。

二 柴垣清メモ①「張物玩具商分布圖」

柴垣清メモ①「張物玩具商分布圖」(写真1)は、縦二六・七センチ、横一九・五センチの洋紙(昭和一三年八月四日付、大阪府発行「壓縮瓦斯中容器證明書」の裏面)に書かれた分布図である。●と▲は張物玩具商の所在を示し、その印に付された文字は張物玩具商の屋号や通称を示すと考えられる。第二次世界大戦前の『上方』などの雑誌に掲載された郷土玩具関係の記事を参照すると、●は廃絶、▲は現存を表していると考えられる。

図1は写真1の一部の情報をトレースしたものである。●▲に付された文字の代わりに通し番号を付け、表1において番号順に

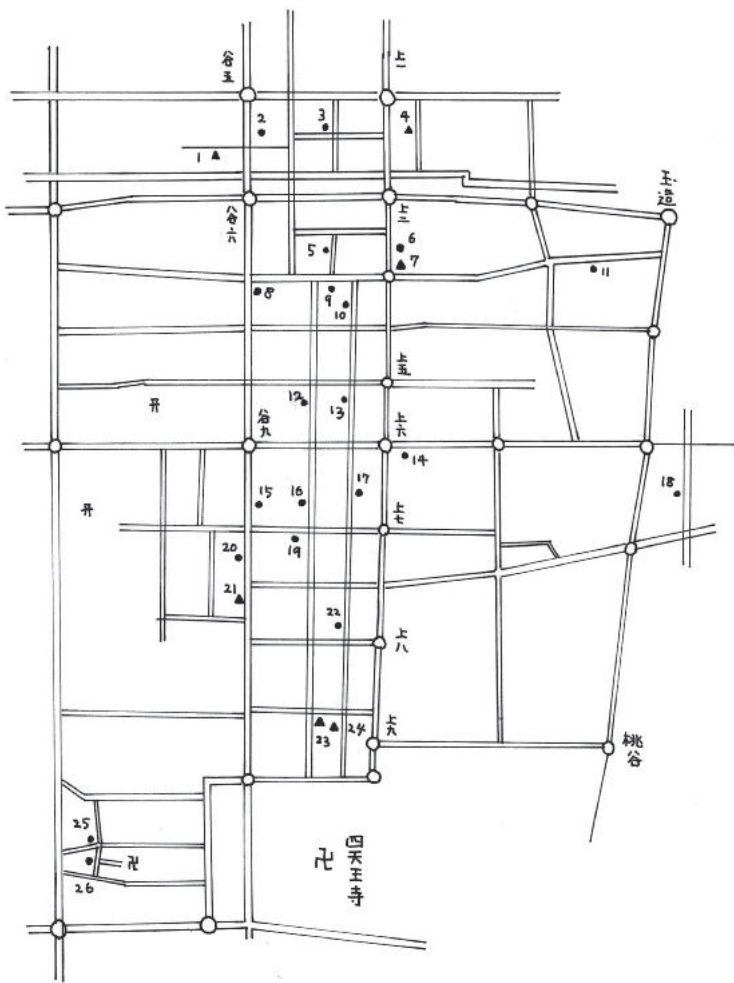


図1 張物玩具商分布圖 (トレース)

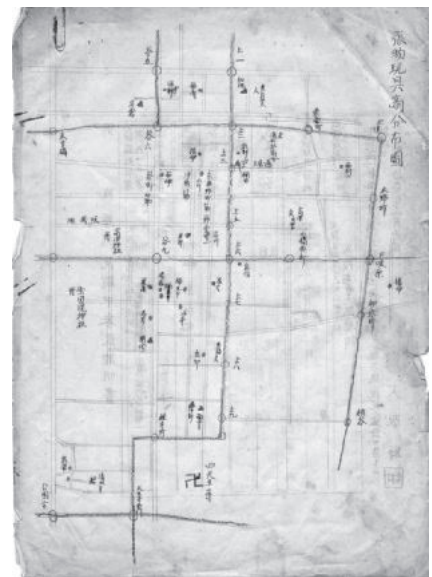


写真1 張物玩具商分布圖

番号	記号	通称	名前等	住所その他
1	▲	名倉	名倉吉倉	東区十二軒町
2	●	河宇	河内屋宇兵衛	谷町五丁目宮林署坂下二在ツタ
3	●	面清	柴垣清七	池田出身、東区龍造寺町
4	▲	加地	加地勇吉	東区広小路
5	●	張伊		東区北桃谷町
6	●	泉新	和泉屋新三郎	和泉出身、新町焼ノ時ニツブレタ
7	▲	楠田	楠田与三郎	東区空堀通三丁目
8	●	面伊	柴垣半七	姫路出身、谷町筋空堀南入東側
9	●	小川	小川久七	姫路出身、東区南桃谷
10	●	—	—	東区南桃谷
11	●	面利	赤松利吉	東区宰相山町
12	●	木村		東区上汐町二丁目
13	●	品川	品川熊七	姫路出身、東区東平野町二丁目
14	●	泉作		大軌上六裏、親方ヲ凌グ腕ヲ持ッテ居タ由、何デモスル人
15	●	尾直	尾惣事	天王寺区谷町筋生玉表門北へ入ル
16	●	楠木ヤ	楠木屋	生玉表町附近、河内嫁入り人形練物一式
17	●	張吉		東区東平野町三丁目
18	●	播伊	山本	鶴橋付近
19	●	河喜		天王寺区生玉筋榎ノ付近
20	●	馬芳		生玉消防署ノ西側
21	▲	明珍		天王寺区生玉前町、ネリヤ
22	●	泉卯		東区上本町八丁目付近
23	▲	河新	中村新太郎	天王寺区、相撲取屋（清水寺北門）ノ権利ヲ買ッテ河新ガ相撲取ヲ造ツタ
24	▲	面十	赤松十吉	天王寺区内平野町六丁目
25	●	泉常		清水寺阪下付近
26	●	—	—	天王寺区

* 「張物玩具商分布図」により表を作成し、「張物ネリ物製造家系統」・「張人形諸類控」への書き込みをもとに加筆。

表1 張物玩具商一覧

張物玩具商の通称、名前等、住所その他の情報を加筆して一覧表にまとめた。表1のうち、10番と26番については、分布図に所在地が示されているものの、通称・名前等については記載がない。この分布図によって、おもな張物玩具商が上町筋と谷町筋のあいだの南北に集中していたことが初めて明らかとなった。

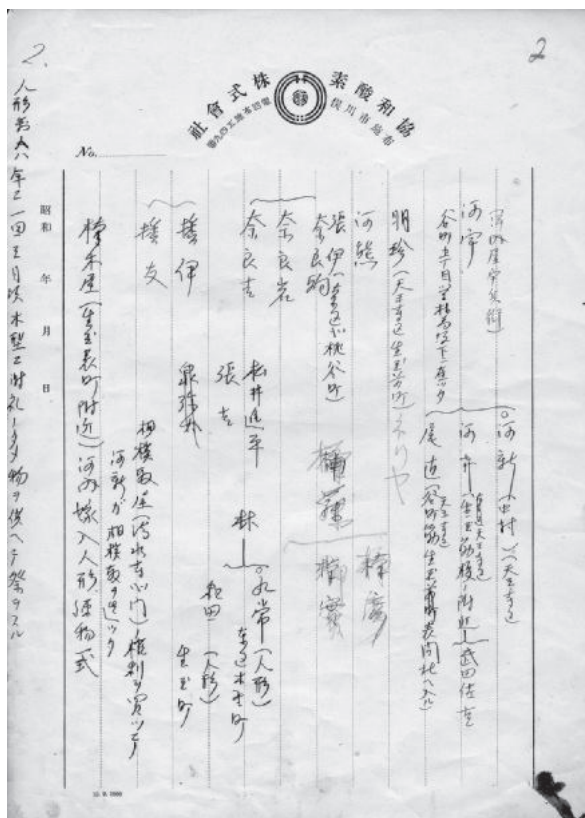


写真3 張物ネリ物製造家系統

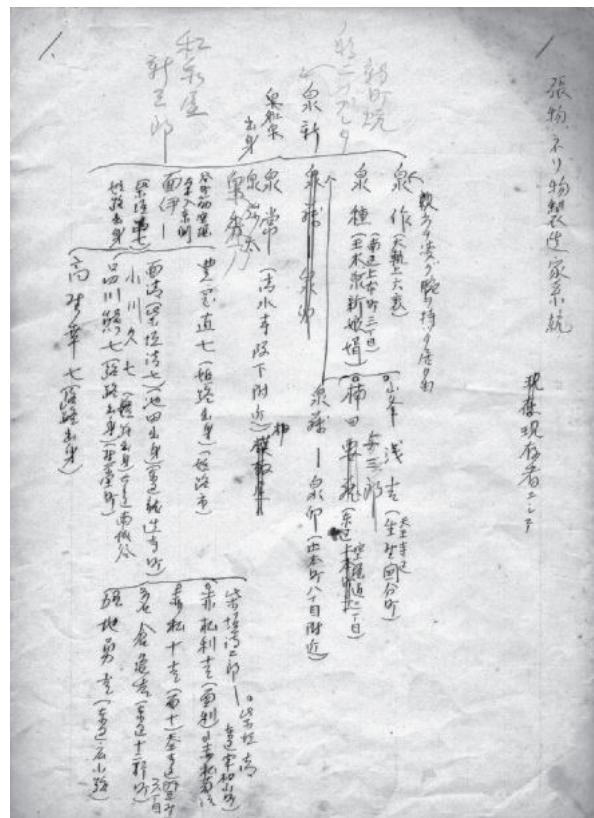


写真2 張物ネリ物製造家系統

倉ガ七ツアリ、ソノ中ニ人形ノ型及製品ヲ一杯ツメテ居タ由、庭先ガ広荘ニシテ山吹ヲ多ク植エテ居ツタ、ソノ名ガ高ク人ガ見ニ来タ由

型ヲ造ル型師ガ常用トシテ一人傭ツテアツタ由、然ルニ息子ガ放蕩ノ結果家ガオトロヘテ皆死絶エタ

木田ノ墓ハ天満寺町デンドー寺ニ在リ

又住吉神社ノ石燈籠ヲ寄進セリ、玩具商一同トシテ泉新ノ名ガアリ

泉作ノ作ツタ左大臣右大臣ガ現在天満天神ニアリ

神農ノ虎ハ明治十八年ニ大阪市中心コレラガ萬延シタ時ニ黄色ヲツケタヲ

治ルトノ事デ虎ヲ造ツテ賣ツタ由

最初河宇ガ造リテ御堂筋ノ問屋作田ヲ経テ神農サンニ納入セリ

後河新ト面清(天満ノ讃岐屋ガ止メタノデソノ型ヲ買ツテ始メタ)ガ神

農虎ヲ造リ天満樋ノ上町ノ問屋菱屋ヲ経テ神農ニ納メリ

現在デハ楠田要蔵(東区空堀通三丁目)ガ一手ニテ造リ神農へ直接納入セ

リ

以上の記載によれば、泉新の先祖は木田姓で、墓が天満寺町の「デンドー寺」にあるとされる。しかし、一致する寺院は現在見当たらない。ただし似た寺院名として浄土宗の「善導寺」がある。善導寺の関係者によれば、木田姓の墓は承知していないとのことである。その他、大阪天満宮の左大臣・右大臣像の製作者や、少彦名神社の神農虎製造をめぐる経過など、興味深い記載がみられるが、詳細については今後検討していかなければならない。

おわりに

張子は「張物」、張子でつくった人形は「張人形」と呼ばれ、江戸時代から大阪の名産として知られていた。大阪は張子の材料に使う反故紙を手しやすという地の利もあり、西日本における張子生産の中心地となっていた。張子は木型に何枚もの反故紙を重ね貼りし、乾燥後に木型を抜き取り、色彩を施して仕上げる。明治時代に入ると、ブリキやゴムなど新素材を使った玩具が登場するが、張子の玩具は値段が安くて壊れにくく、しかも運搬が容易であることから庶民の玩具の主役となり、明治時代に全盛期を迎えた。

柴垣コレクションに含まれる、明治一二年の張子職人仲間の記録『張人形諸類控』には、二七人の張子職人の名前と製品の一覧が記されており、大阪張子の盛時のようすがい知ることができる。その製品をみていくと、職人のなかにも技術の系統があり、河宇・河喜・林喜重郎などのように人形や玩具一般を手がける系統と、泉作・柴垣半七・尾直のように面を主として様々な製品をつくる系統とに分かれていたことがわかる。

なお『東区史』第四巻によれば、昭和戦前期に張子玩具の生産を続けていたのは、面清(龍造寺町)・名倉亀吉(十二軒町)・加地勇吉(広小路町)・赤松菊治(宰相山町)・楠田与三郎(空堀通)などの職人で、戎物・かづら・達磨・虎面・力士などの張子や獅子舞などが製作されていた。第二次世界大戦後、そうした張子玩具製造家の大半は廃絶し、楠田家と峯家が大阪張子の伝統を受け継ぎ、張子の虎・達磨・面・獅子頭などを中心に製作している。なお一九九四年には、柏原市の峯商店が製作する「大阪張り子」が、大阪府の「大阪の伝統工芸品」に指定されている。

参考文献

- 伊藤廣之『館蔵資料集二〇 大阪の郷土玩具』大阪市立博物館、一九九三年
- 伊藤廣之「大阪の張り子玩具」『おおさかふ』第二八号、大阪府府民情報室、一九九五年
- 伊藤廣之「大阪と郷土玩具」『大阪春秋』第一四七号、新風書房、二〇一二年
- 大阪市東区法円坂町外百十七箇町区会編『東区史』第四卷文化篇、大阪市東区役所、一九四一年
- 大澤研一・澤井浩一『柴垣清収集資料―近代大阪の歴史と芸能資料コレクション―』（展覧会目録一六六号）大阪市立博物館、一九九二年
- 奥村寛純『浪花おもちゃ風土記』村田書店、一九八七年
- 武井武雄『日本郷土玩具』金星堂、一九三四年
- 中村新太郎ほか「大阪玩具座談会」『上方』一一五号、創元社、一九四〇年
- 前田たらちね「減び行く大阪の郷土玩具」『上方』一一四号、創元社、一九四〇年